死を考え、現在を見つめ直す

推薦者：保坂隆氏
聖路加国際病院精神腫瘍科医長

人は死なない

矢作直樹　著
（バジリコ株式会社）

サイコオンコロジーに残りの人生を捧げると決意し、2010年に東海大学医学部精神医学教授を退職した保坂隆氏は、聖路加国際病院に精神腫瘍科を新設してもらい、現在は、同科でがん患者とその家族の心のケアに尽力している。

しかし、精神腫瘍科にはこれまで経験したことのない葛藤が待っていた。保坂氏は同科でがん患者を前にするうち「33年間の精神科医で培った知識や技術では対応できないことが多々あることに気づかされた」。新たに認知行動療法を学び、治療の際実践し対応してみた。次の葛藤は、これまでに精神科医として「人の看取り」に遭遇することが少なかった保坂氏は、ターミナルケアができない。自分は、医師として何かが足りないのではないか。１人思い悩む。

そんな悶々としたときに知人が高野山大学を紹介してくれた。死を前にした患者に向き合えない自分を変えたいと考えた保坂氏は、12年４月から通信制の高野山大学大学院密教学修士課程に入学する。この短い間でも、宗教観や死生観に関する勉強ができたと保坂氏はいう。

そのとき出会った１冊が「人は死なない」である。著者は東京大学医学部附属病院救急部・集中治療部部長の矢作直樹氏。著者の仕事やプライベートで遭遇した体験を元に死生観が語られ、西洋医学では説明のつかない事象のエピソードが紹介される。本書のモチーフはシンプルで「人間の知識は微々たるものであること、摂理と霊魂は存在するのではないかということ、人間は摂理によって生かされ霊魂は永遠である、そのように考えれば日々の生活思想や社会の捉え方も変わるのではないかということ、それだけです」と記してある。

保坂氏は、「スピリチュアルケアについて書かれた本の中では最も優れている。今まで分かりにくいと思っていたことがすっきり分かった」と同書を絶賛。診察で以前にはできなかった、「亡くなる直前のがん患者に対し、がんになった意味について考えてみよう」など「スピリチュアルな質問ができるようになった」と語る。そして出会う医療関係者に対してことあるごとにこの本を推薦しているという。

人間の死について考え、死生観を見つめ直す。さらには現在の自分を考えるきっかけを与えてくれる、力ある本といえるだろう。